地域資源の保存・再生利用に関する調査・分析
- 山梨県南巨摩郡早川町・赤沢集落の保存活動を例として -

日大生産工(院)　○甘利　未来
日大生産工　　坪井　善道

1.研究の背景と目的

多様な風土をもつ日本は長い時間を経てそれぞれの環境に適した集落・まちなみを持つにいたった。しかし 1960 年代の高度経済成長以来, 全国的に農山漁村における過疎・高齢化が進み集落活動の継続が困難となり集落の消失が相次いでいる。このような日本の原風景が失われることへの危惧から各地で町の保存を訴える市民運動が起こり，これを受け伝統的建造物群保存地区制度が設けられた。2006 年現在, 重要伝統的建造物群保存地区(以下重伝建地区)に選定された地区は 80 にのぼる。しかし重伝建地区に選定された地区であっても人口の流出は止めることができず，少ない構成人員による地区維持が難しくなってきている。

本研究では 1993 年に重伝建地区に指定された赤沢集落を事例とする。赤沢の重伝建指定建造物の特徴は短冊状の敷地に切妻平入型の造りで，内戸の外側にはL字型の通り土間があることである。これは，この地域がかつて旅館業で成り立っていた時代の名残で，この土間から一度に大人数の宿泊客が客室内に入ることができるよう工夫されたものである。また，緩斜地に立地する集落の性格上，各家は山手に石垣を背負い，谷に向かって開かれた屋敷配置を取っている。石垣は「ごぼう積み」で水はけが良く苔むし、石垣の隙間に草花が咲いている。赤沢の町並みは伝統的な建造物・石垣・坂道・石段などから構成され周辺の山並みとよく調和した集落景観を保っているため重伝建地区選定にいたった。

赤沢の保存活動を調査・分析することで活動の効果と問題点，更に今後の集落における役割を明らかにすることを目的としている。

2.調査概要

赤沢において，2006 年 8 月から 2006 年 10 月まで計 6 回のべ 2 ヶ月間現地で住民へのヒアリングを中心に調査を行った。

ヒアリング項目は家族構成，職業の他，重伝建制度・観光・まちづくりを行っている組織・集落の活性化などについてである。

3.調査地概観

3.1 地理的概観

山梨県南巨摩郡早川町は，山梨県の南西部に位置し町内の集落は，早川やその支流に沿うようにして，高度 300m～1000mの山麓や中腹の斜面地に立地しているが，町域の 98%が山林である。赤沢集落はこの早川町内の集落の 1 つで，早川町の南東部，早川の支流である春木川右岸の高度約 500m の斜面上に位置する(図 1)。

図 1　研究対象地域

3.2 人口

2006 年 10 月現在で 71 人，27 世帯が居住しており人口構造はやや逆ピラミッドを描いている(図 2)。赤沢の高齢化率は 43.7%で全国水準である 21.0%(2005)や山梨県の 21.8%と比べても高齢化の進んだ状態にある。

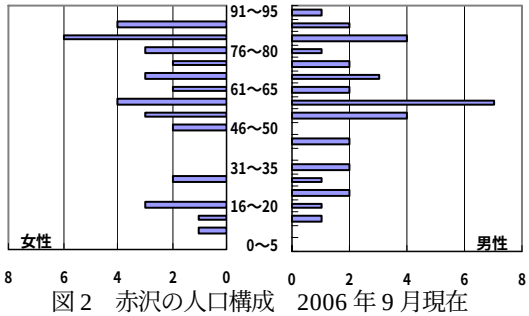

図 2　赤沢の人口構成　2006 年 9 月現在

Survey and Analysis of Preservation and Recycling of Local Resources

－A Case Study on Preservation Activity of Akasawa Village, Hyakawa,Minami-koma, Yamanashi Pref.－

Miki AMARI and Yoshimichi TSUBOI

次に世帯の構成について見る(表 1)。世帯の人数に着目すると 2 人暮らしの世帯が 10 戸で最も多い。夫婦のみの世帯が 6 戸，親子の世帯が 4 戸である。夫婦の世帯はいずれも世帯主の年齢が 70 歳以上である。ヒアリングによると，この 6 世帯のうちほとんどの世帯において子供が赤沢に帰ってくる予定は無いとの回答であったため，これらの世帯はいずれも高齢者の独居や空き家の予備軍であるといえる。

表 1　世帯人数別世帯数

世帯人数(人)	世帯数(戸)	人数(人)
1	6	6
2	10	20
3	3	9
4	6	24
5	0	0
6	2	12
合計	27	71

3.3 歴史

赤沢は日蓮宗総本山である身延山久遠寺と霊山七面山とを結ぶ参詣道である身延往還上の宿場として、また身延山から七面山への物資運搬の基地として栄えた。自動車交通が発達する昭和 30 年代までは，七面山参詣は身延往還を利用した徒歩であり，新道集落から七面山までの高低差もあったため，日帰りによる参詣はできず身延往還上の中間地点であり，人が居住していた赤沢集落が宿場としての機能を持つようになる。赤沢集落に立地した旅館は，参詣集団である「講」の定宿として利用されたことから「講中宿」と呼ばれた。現在，集落内で営業している講中宿は 1 軒のみである。東京からの鉄道が整備され，かつ自動車交通がさほど整備されていなかった大正期が宿場として最も栄えた時期であった。その後，表登山口である羽衣までの車道が開通すると，赤沢を経由せずに身延山と七面山に参詣することが容易になり，赤沢を訪れる人は減少した。

3.4 空き家

集落内に現存する 39 戸の住宅のうち 13 戸が空き家となっている(図 3)。赤沢の空き家率 33.3%は早川町全体の 37.2%と比較して有意差は認められない。

しかしこのうち 5 戸が 2000 年以降の転出で，高齢者世帯を中心とした集落外への転出が増加している。また、独居世帯 6 戸のうち 4 戸が 65 歳以上であり 4

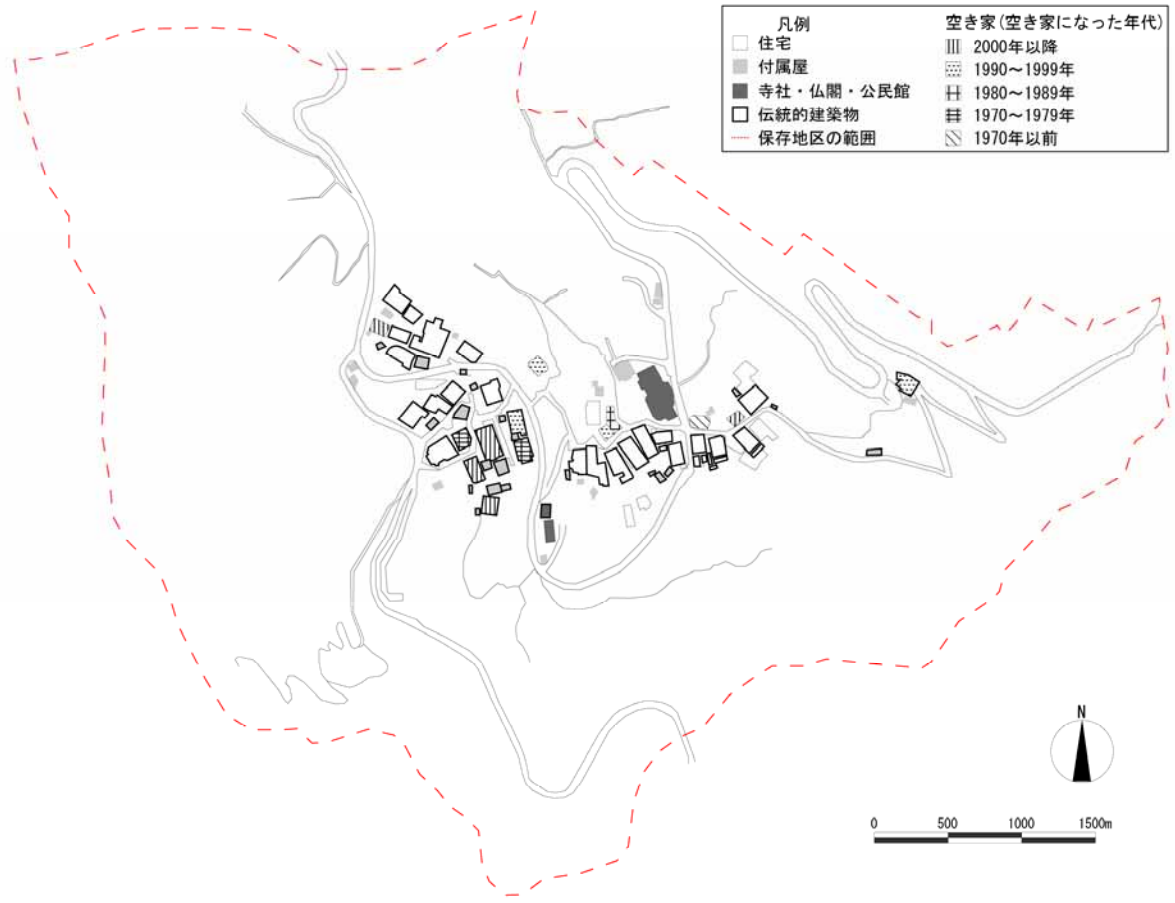

図 3　空き家の分布

戸とも家の後継者の予定が無いとのことから今後更なる空き家の増加が見込まれる。

4.まちづくりにおける各組織

赤沢では現在「赤沢青年同志会」「赤沢そば処組合」「赤沢町並み保存会」の3つの組織が活動している。

4.1 赤沢青年同志会(以下同志会)

1980 年に U ターン者が結成し、伝統的な年中行事の復活、町並み保存などのまちづくり活動を行ってきた。この同志会の活動が重伝建地区の指定にいたるきっかけとなった。現在会員は 17 名。結成当時 20 代後半～30 代であった彼らも 50～60 代となり仕事や地縁組織において重要な役に就く年齢となり忙しく，同志会としての活動は減ってきている。

しかし活動についてのヒアリングで多くの人が「出来ることを無理の無い範囲で」と答えており，活動そのものが負担となることより，活動を継続することを前提に捉えている。

また仕事を引退した後のビジョンとして赤沢におけるまちづくりの案を温めている人も多い。

4.2 赤沢そば処組合

赤沢は参詣客が多く訪れていた頃，「巡礼そば」として手打ちそばが名物であった。重伝建地区に指定され観光客が訪れるようになったものの，とどまる場所が無い。また往時を知る参詣客から「巡礼そばが食べたい」と要望があったことから 2003 年に住民達が「そば組合」を立ち上げ，そば屋を営業するようになった。この組合が出来るまでは赤沢での地域活性化活動は同志会が主となるものばかりであったが，組合の発足人は同志会に属しておらず集落内でのまちづくりにおける新たな動きが窺える。

組合への加入は世帯単位で，現在 13 世帯が加入している。組合が始まった頃は旅館で間借りするなどして営業していたが昨年集落内の空き家を修理し店を構えるに至った。間借りしていた頃は予約やイベントなどのみの不定期営業であったが，現在は土・日・祝日と平日は予約日のみ営業を行っている。現在のところ組合員も各自仕事を持っているため基本的に休日のみの営業であるが，毎日営業することを目指している。

4.3 赤沢町並み保存会

住民たちの手によって町並みの保存・活用を行うことを前提とした重伝建地区制度であるが，これまで赤沢は専門家が老朽化の激しい建造物を優先的に修景する様に提案し，集落がそれを受け入れるという形をとっていた。そのため住民間で次にどの家を修景するかなどの周知がうまくなされない状態にあった。このことが住民間での不満や無関心を引き起こす要因になるという声が上がり今年立ち上げられた会である。

会は赤沢の全住民をもって組織されている。

5.重伝建地区選定 10 周年記念行事

赤沢で 2005 年 5 月 20 日～29 日竹造形作家保坂紀夫氏の作品を展示するイベントが行われた。展示場所は営業中・休業中の旅館・公民館・住宅など計 8 箇所である。このイベントをきっかけに住民たちは集落への意識を新たにしている。これは以下に挙げるイベントの特徴がもたらした効果であると考えられる。

・竹の造形作品の展示イベントであった
・集落全体が主催という形での参加であった

赤沢の建築物は特徴として参道に面して通り土間，縁側，客座敷が一体となった開放的な空間を持つのだが，現在休業中の旅館は雨戸を閉めたまま生活している。しかし会期中は全ての雨戸を開け客座敷に展示を行った。竹の造形品が空間によく合い，通りからの眺め，自分達の暮らす家の良さを再認識するきっかけとなった。会期中は客足も伸び、住民たちは展示場所に付いたり駐車場の整備などを通して多くの客から集落を褒められることで誇りを持つきっかけとなった。

図 4　赤沢集落

6.問題点と今後の課題

住民が日常感じている問題点として人口の減少，特に子供の減少が多く上がる。これは子供を持つ年

代が赤沢に戻っていないことを現しているわけだが，その理由として「若い人が戻ってきても仕事が無い」が第一に上がる。同志会は「子供が住んでくれるまちづくり」を活動の根底としていた。この同志会の子供世代には，すでに赤沢に在住している者，戻る予定のある者，戻ることを希望している者がいる。家族を連れてUターンする予定の者も居ることから，現在赤沢で生活する 15 歳以下の子供は 3 人であるが数年の間に増える可能性がある。前述のとおり同志会メンバーでは赤沢の活性化案を持っている人も多いことから，メンバーの子供達も戻ってきてからの仕事として赤沢で出来る仕事を視野に入れている可能性がある。

現在赤沢集落で生活している 26 世帯のうち同志会に参加しているのが 9 世帯(会員 17 人のうち 16 人が夫婦であるためここでは便宜的に世帯で数える)，そば組合に加入しているのが 13 世帯。このうち 8 世帯が両方の組織に所属している。どちらにも所属していない 12 世帯のうち 2 人暮らし世帯が 7 世帯、1 人暮らしが 4 世帯である。また，12 世帯中 9 世帯の世帯主が 80 歳以上であり，前述の空き家予備軍が 7 割程度を占めている。組織に所属していないのはまちづくりや地域の活性化への意思が無いためではない。そば組合への参加の有無を聞いた時，参加していない人は「もう年だから」と答える人が多く所属していないのは年齢に因る問題で，労働力としての協力が出来ないためであると推察できる。参加していない人は活動に対して「そば組合がそば屋を営業している」程度の認識しか持っていない。そば組合の側の側からすると「もちろん労働力は多いにこした事は無いが，集落のもてなしの場としてのそば屋であるため，労働協力はできずともそば屋の営業に意見を出してもらい皆で運営できる店でありたい」と考えている。また集落内でのそば屋への認識が上がることで組合の活動が活発化することも考えられる。ここで集落内に意識の相違が生じてしまっている。

赤沢はもともと講の団体客でにぎわった集落であり，もてなしの心が厚く集落内を観光する客に対して好意的である。道で行き交うと「どうぞごゆっくり」と声をかけられることがある。散歩中の高齢者の場合では挨拶を交わすと，自然の流れとして往時の集落や正面にそびえる七面山の紹介をしてくれる。いずれの会に所属している人も所属していない人も基本姿勢としては観光客の増加を望んでいる。13 年前，同志会の活動が盛り上がりを見せ重伝建地区の選定にいたった。13 年という月日とともに修景が進み目標が達成されてきたことで徐々に下がってきていたモチベーションが，竹のイベントを経て集落に対する誇りという形で再び盛り上がっている。「出来ることを無理の無い範囲で」行い活動を継続することも重要であるが，今は盛り上がりを利用して体勢を立て直すことが必要である。活性化は若い世代のUターンも促すであろう。

まちなみ保存会は現在まだ会の規約や代表者の選出を行っている段階であるが全世帯をもって組織される会であることから，これまで同志会の活動やそば組合の活動，修景計画などそれぞれで行われてきた活動を総括することの出来る会にしていくことが必要であるといえる。

〈参考文献・URL〉
1） 真島俊一他　TEM 研究所編「山梨県早川町・伝統的建造物群保存対策調査報告　赤沢」山梨県南巨摩郡早川町 1992.4
2） 保岡孝之「「伝統の町並み」の歩き方」青春出版社　2003.7
3） 柴田彩子　赤沢青年同志会によるまちづくり活動の分析：山梨県南巨摩郡早川町の事例　1993.1
4） 向井真行　山間集落における家並み保存活動による地域活性化に関する研究－山梨県早川町赤沢を事例として－ 2004.1
5） 遊佐敏彦　空き家の管理・利活用に関する研究　その 1～山梨県早川町における空き家の実態調査　日本建築学会大会学術講演梗概集　2006.9　P611～612
6） 全国伝統的建造物群保存地区協議会ホームページ http://www.denken.gr.jp/d_main.html　2006.4
7） 2000 人のホームページ http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/2000/top.html　2006.10
8） インターネットやまだらけ http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/ 2006.10